

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhg@extra.ocn.ne.jp URL: http://blrhg.org/



所長の諏訪山だより

やまい 病と差別

世界中で新型コロナウイルスの感染が広がっています。日本ではオーバーシュート（感染者の爆発的急増）がまだ起こっておらず、「持ちこたえている」と指摘されてはいるものの、オーバーシュートがいつ日本で起きても不思議ではありません。こうした感染拡大のなかで、災害派遣医療チームとして、武漢市からの帰国者やクルーズ船乗客に対応した医師や看護師が職場でばい菌扱ひされ、「いじめ」に遭っているとの報道がありました。また、ロンドンではシンガポール人留学生が「コロナウイルスはいらない」と言われ、集団暴行を受けたり、ニューヨークの地下鉄では中国人女性が暴行を受けるなど、コロナウイルスをめぐる差別事象が世界中で頻発しています。

このように、病気と差別が結びつくことは、これまでも数多くみられました。日本の中世社会ではハンセン病が業病とされ、その患者たちが共同体から排除されました。現在でもハンセン病元患者やその家族に対する差別はなくなっていない。また、1986年に長野県松本市でフィリピン人女性のHIV感染が報道されると、外国人女性が銭湯やレストランで利用を拒否されたり、松本ナンバーの車で東京のホテルにきた人たちがホテルの利用を断られるなど、いわゆるエイズパニックが起きました。そして、翌年には神戸市で日本人女性がエイズを発症し、死亡したことが報道されると、写真週刊誌がこの女性の実名と顔写真を掲載したり、この女性がセックスワーカーであったというデマまで流しました。

エイズについては、米国でリスクグループという言葉が使われました。これはHIVに感染する可能性が高い男性同性愛者、セックスワーカー、麻薬常用者を指し、HIV感染を広げないために、これらのリスクグループに対する支援・対策を進める必要があるとされたのです。ところが、この言葉が日本に入ってくると、HIVを振りまく危険な存在という意味でリスクグループという言葉が使われ、管理の対象とされたのです。

感染症は移るかもしれないというおそれから誤解や偏見が広がりやすく、それが差別となってあらわれます。こうした誤解や偏見を批判していくとともに、感染のリスクが高い行動を避け、誰もが感染する可能性があることを念頭に置き、感染確認の有無にかかわらず、他者に感染させない行動をとることが大切です。憎むべきはウイルスであり、感染者ではないのです。

所長 石元清英



連続漫画小説『あさドラ!』1~3巻 (以下続刊)

浦沢直樹著、2019年4月~、1巻650円/2-3巻700円(税別)、小学館 ※『ビッグコミックスピリッツ』で連載中

予知能力でもあるのだろうか——。最初のページを開いて、思わず手がとまった。

浦沢直樹の新作、連続漫画小説『あさドラ!』は、2020年、現代の東京のシーンから始まる。巨大な怪物の影が、ビルを破壊し、人々の背後から迫る。炎の中を逃げ惑う人々。「このままでは新国立競技場が!!」「東京オリンピックが……」。

この作品の連載が始まったのは2018年10月6日、新型コロナウイルスが巷を騒がす以前のことだ。作者自身も、オリンピックが一年延期になったとき、さぞ驚いたに違いない。図らずも自分が描いたことが、形は違えど、現実となってしまったことに。

浦沢直樹は『20世紀少年』『YAWARA!』など、数々のヒット作品を生み出している漫画家である。とくに近年の彼の作品には、現代社会の深層を、鋭くえぐるものが多い。現政権を思い起こさせる政治家や、世界的エンターテインメント施設の背後にある闇の部分、過去、現在、未来という長いスパンを交差しながら、民心を操る危うさや、正義と悪、そして真実とは何かを問いただそうとする。

さて、本作は「戦後から現代にかけて、可憐にたくましく生きた名もなき女性の一代記」とあり「連続漫画小説」と銘打っている。主人公の少女、浅田アサは小学5年生。1959年、のちに伊勢湾台風と呼ばれる暴風雨の中、産気づいた母のために医者を呼びに走るアサ。無事に母の下へ医者を送り出したアサは、医者の娘と間違われ、誘拐されてしまう。誘拐犯の男は太平洋戦争時「空の勇者」と呼ばれた飛曹長だった。悲しいかな、金策のため誘拐した「医者の子」は、貧しい大家族の一員だったが、何はともあれ、台風一過の町の惨状を見たふたりは、被災した人々のために、飛行機を使って空からおにぎりを配り始める。だが、その飛行機を手に入れるとき、男は銃弾を浴びていた。多量の出血で意識が遠のく男の代わりに、11歳のアサは操縦桿を握りしめる。一人でも多くの人におにぎりを届けなければ、と。

単行本は現在3巻まで。浦沢作品にすれば、まだ序章に過ぎない。激動の戦後を、少女はどんな社会悪に立ち向かい、どう生きていくのか、怪物の正体は何なのか、物語は始まったばかりである。

話は変わるが、みなさんは韓国映画『パラサイト』をご覧になっただろうか。筆者はスクリーンを見ながら、浦沢漫画を見ているような感覚にとらわれた。物語のもつ社会性もそうだが、ひとつ、ひとつの印象的なシーンが、浦沢作品にオーバーラップする。家族4人が車座に座って宅配ピザの箱を折りながら話すシーンも、地下室から階段を一段ずつ登ってくる上流階級の「奥様」のビジュアルも。

監督のポンジュノは、浦沢直樹の大ファンで、かなり影響を受けているという。アカデミー賞の受賞以来、日本のメディアでは監督のインタビュー記事がたくさん掲載されたが、その中でもたびたび浦沢作品を引用しながら話す姿が印象的だった。

日本と韓国のクリエイターがお互いにリスペクトしあい、それぞれの土壌で素晴らしい作品を生み出していく。世界的なウイルス渦を克服するには、このような信頼関係こそが必要ではないだろうか。(K)





『トラックドライバーにも言わせて』

橋本愛喜著、新潮選書、2020年3月、760円＋税

現在日本の物流の約98.9%はトラック運送である（2018年、国土交通省発表）。昨今、少子高齢化が進展し、また、インターネット通販が盛んとなるなか、運転手不足は深刻になっており、物流崩壊の危機と言われている。今回紹介する『トラックドライバーにも言わせて』では、物流業の実態やドライバーへの蔑視、その背景などが、平易な文章で綴られている。

書名からも分かるように著者の橋本は元トラックドライバーだ。町工場経営、トラックドライバー、日本語教師などを経て、現在はフリーライターという変わり種である。

職業に貴賤はない。しかし、特定の職業を見下すような人は多くいる。橋本がトラック事情について書くと、「トラックドライバーのような底辺職には就きたくない」というようなコメントや、トラックドライバーのマナーの悪さを指摘されることがよくあるそうだ。また、テレビ番組などで、トラックドライバーに転身した人を取り上げる際に「転落人生」などと題されることもあるという。橋本はこれに対して、「体力と精神力、スキルが必要な「専門職」」であり、「人が“転落”した先でする仕事」でも「誰でもできる底辺職」でもないと反論する。本書で紹介されているトラックドライバーの仕事を見ると、確かに誰でも簡単にできる仕事でないことははっきりしている（もちろん、簡単にできる仕事でも見下していいわけではないが）。

また、「マナーの悪さ」については、第2章「態度が悪いのは理由がある」で詳しく書いている。「トラックがノロノロ運転する理由」「路上で休憩せざるを得ない事情」「なぜハンドルに足を上げて休憩するのか」「休憩時にエンジンを切らない理由」など、その背景にある、ドライバーの心がけだけではどうしようもない、トラックの構造上の問題、法律や制度、荷主の問題があることを解説している。もちろん、トラックドライバーによるゴミのポイ捨てなどについては、その背景の説明もするが、ドライバーに反省を促している。

ところで、橋本愛喜は女性である。「愛喜」という名は男女両方あるので、男性だと思ってここまで読んできた方もいるだろう。著者は元トラックドライバーなので男だと思い込んでいたとしたら、それは偏見である。しかし、そうしてしまうのも仕方ないくらい女性ドライバーは極端に少ない。トラックドライバーに占める女性の割合は2.4%とのことだ（国交省のデータによる）。政府は人手不足解消のため女性ドライバーを増やす目的で、2014年に「トラガール促進プロジェクト」を立ち上げた。「業界イメージの改善に向けた積極的な情報発信」のため、ネット上に専用のサイトも作った（<https://www.mlit.go.jp/jidosha/tragirl/index.html>）。

しかし、橋本はこのプロジェクトには「全く賛同できない」として、理由を2点挙げている。1点目はネーミング。2点目は専用サイト上にちりばめられたピンク色。橋本は「ホワイトカラーの職場にいる女性をピンク色で「事務ガール」としてみれば、「トラガール」の異様さに気付くはずだ」と言うが、日本国政府はいまだに気付いていない。「真っ先に改善しなければならないのは“業界イメージ”ではなく、「現場の環境」である」ことに議論の余地はない。

私たちの生活はトラックドライバーがいなければ成立しない。それはドライバーの少なからぬ犠牲の上に成り立っている。誰かを踏みつけなければ成り立たないようなシステムは早々に変更すべきである。ドライバー不足解消を云々する前に、法制度の整備、荷主や宅配便を受け取る我々の意識改革が必要なことを本書は示している。（Ka）



2020年度 人権セミナー

第1回「農地改革と部落——部落農家は小作地解放から排除されたのか」

■講師：石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長）

■日時：2020年6月13日（土）14：00～16：00

■場所：兵庫県立のじぎく会館（ふれあいルーム）

■参加資料代：【一般】1000円【正会員】無料【賛助会員・定期購読・学生】500円

農地改革において部落の小作農の多くは、小作地の解放から排除された——1980年代ごろまでの部落問題研究の分野では、これが定説となっていました。農地改革では、経営耕地の零細化を防ぐために、2反未満の零細小作農を小作地の売り渡し対象としなかったために、零細小作農が大半を占めた部落は、農地改革の恩恵を受けなかったというのです。しかし、これはまったく事実ではありません。部落の零細小作農も周辺の小作農と同様に小作地の売り渡しを受けているのです。

セミナーでは、部落で農地改革がどのように行われたのか、その実態を明らかにし、どうして上記のような誤解が生じたのか、そして、その誤解がなぜ定説となってしまったのかについて考えます。

第2回「食肉センター見学」

■日時：8月（日程未定）

■場所：たつの市

フィールドワーク

第4回「日本の戦後体制と在日コリアン」

■日時：12月12日（土）14：00～16：00

■講師：水野直樹（京都大学名誉教授）

■場所：のじぎく会館（101・102号室）

第3回「いま、部落問題を語る——新たな出会いを求めて」（仮）

■日時：10月3日（土）14：00～16：00

■講師：山本栄子（『歩——識字を求め、部落差別と闘い続ける』著者）

山本崇記（静岡大学人文社会科学部教員）

■場所：のじぎく会館（201号室）

第5回「同和対策事業から平等を考える」

■日時：2021年2月6日（土）14：00～16：00

■講師：柴原浩嗣（大阪府人権協会事務局長）

■場所：のじぎく会館（101・102号室）

○申込・問合せは当研究所まで

人権啓発研究第41回兵庫県集会（仮称）

■日時：2020年11月28日（土）

■場所：三田市総合文化センター（郷の音ホール）他

事務局から

- 法政大の学生たちが昨年、朝鮮半島出身の元BC級戦犯のドキュメンタリーを制作したという。いまこのときに、日韓の歴史に向き合おうとする若者がいることが素直にうれしい（K）
- 新型コロナウイルス禍、専門家の言うこともいろいろで、何が正しいのかよく分かりません。私は、とりあえずいつもより睡眠時間を増やしています。皆さまもご自愛ください。（Ka）
- オリンピックが今後どうなるにしても、この緊急事態をのりこえられるとよいなと思うこのごろ（Y）
- 知っている幾人かの子どもたちが今春、地元を出て様々な地域に進学する。ただでさえ不安な新生活なのに、新感染症の広がり…。学校がストップすることもあるだろう。大きなトラブルなく過ごせるよう祈るばかりだ（H）